門出の春　　松下幹生

学校終えて　手に職を付け
一人世の中　生きてく為に
十五で街へ　旅立つ事に

まだまだ寒い　田舎の駅で
赤いほっぺた　学生服で
着替えの包み　手渡す母ちゃん

決して戻っちゃ　ならない駅で
母ちゃん涙　見せないように
片道キップ　黙って出した

一人前に　なってみせると
板場の端で　我慢を重ね
包丁持てる　その日来るまで

人に一目　置かれるように
決して里には　帰らぬ覚悟
涙は見せず　じっと我慢だ

家を出る時　父ちゃんに向け
行ってきますと　声を掛けたが
ぶっきらぼうに　「あぁ」しか言わぬ

改札口で　母ちゃんそっと
袂に隠す　封筒を出し
困った時に　出して使えと

母の気持ちが　胸を締め付け
封も開けずに　大切にして
心の糧に　俺の支えに

汽車が出る時　力いっぱい

腕振りながら　ホームを駆けて
「達者でなぁ〜」と　大声あげて

汽車が在所の　鉄橋渡る
堤の上に　父ちゃんが立ち
両手を振って　「がんばれよ〜！」と

父ちゃん母ちゃん　きっと立派に
修行を終えて　背広姿で
帰って来ると　心に誓う

30 年の　時が過ぎ行き
自分の店に　父母を招いて
俺の握りに　舌鼓打つ